



官版

語彙

卷三

ホ 2  
4706  
3



門 木 2  
流 4706  
卷 3

語彙卷三

阿部三

あな

歎息の聲あて喜怒哀樂何れも意の切ある時小云辭神武紀羣虜見一人大咲之曰大  
神乎大謂此云執古拾阿波禮阿那於茂志呂古語事之甚切皆稱阿那万十六のや彦の木のき  
神さひ青雲のたをひく日まら雲そがらうる一云安奈尔可武佐備

あな

穴衝返下者夫世の中いられひとあふふ  
ふく笛のよなむつうや移とそたえせ糸

あない

音あない  
人の許あ行き来まる由をひひいよ又事物の様子をよく知りたるをいふ○案内狭三  
太刀もれらる人のこころかこころのをれつあないまると見ゆまの字國語た  
かゆあないしてらへこのねまふ又權あないもあつらぬ人の大將のひとつ  
御つらちのり源浮舟昔もかこころの  
あないまをさりしゆの二三人

あないれづう

歎の切小かりて志をく息のつかまるるなり  
万十あちのまむまの入江のこりぬの

吾彙卷三

あな



安奈伊岐豆加思  
さざひまゆい

あなはいち 俗。せふらち

あなうら

見えぬかな戀〜かぐき香いゆひつゝ 小町集 世の中ふらうら  
我身のありてあり〜あまきとやいそんあなうらとやいりん  
あり 古今物名 あなうらうめふ常なるるる

あなうらね〜

ひのけの意なり 万十六 あらね田の志田の稲を  
くらふつ〜阿奈干稻々々志 たごあらうら  
あなうらら あ〜のうららとらふ和 距 宇亦作 足下也 野  
守鏡序 かの聖人の御足駄をとりいづくかれ  
見給へ〜ここをすす〜佛の道ふ入給ひける

あなねをら〜  
まこハイ ちうどの意 枕二あなねをら〜と驚て  
そまの于定國が事あ〜を侍るをれ  
魚名い〜ぶ〜の  
下小注を

あながら 俗

あながら

あながら〜

いだらうやつま 給 ときとときも 御まへ あながら〜と日ぬ〜  
侍〜あやお〜 まらん 宇俊 俊蔭 泪をなが〜と答ふあながら〜と此  
山をたけぬ〜とさげ〜 たりのほあむららうづる  
さ〜と〜の〜さげ〜 まをを

あながら

興兵距馬 源 源太良 た まら まら ありん まら つか〜おひやふふあながらふ  
た〜と〜と〜と〜と〜と 又 葵 例いあながらなりやあな〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と 詞花 戀上 けりあながらさむむるあながらふ  
ひ〜と〜と〜と〜と 類名 剛 ガチ強 アナガ  
あながら 難 の 難 かまひ 耳ヤカマシキ ちり  
あながら かまひ アヤカマシイ あてかまひ

あながら

ま〜と〜を制する意はな〜なり 枕二 前あながら人々心得〜と〜と  
あながら〜と〜と 源 源帚木 人々笑ふあな〜と〜と 又 夕良 よる  
の聲いね〜と〜と〜と あながらと〜と〜と 又 御法 あながらまら〜と〜と  
まらの顔あて御几帳のか〜と〜と 引上 アヤカマシイ この状を云あり 蜻 下 あな  
あながら シ シ シ シ キ

あながら

あながら

あなぐらも (俗)

虫名つらぐらもの  
下小注す

あなぐら

土の中を掘りて物を扱むる所なり後世  
ハ大なる匣を作り土中不埋て物を貯へ

火災の時の備へす  
親長記 文明十年 廿五日 穴蔵

あなぐらだやく (俗)

穴蔵の匣を造る  
工匠を云なり

あなぐらつらぬめ (俗)

鳥名あまぐらりの  
下小注す

あなぐら (カリカレ)

さぐらりゆめむる  
意なり ○探

あなぐらさる (セズズズレ)

他を〜してサグリモトメサセルを  
ゆめなり

あなぐらむ (ムムムムレ)

同上

あなぐらら (ムムムムレ)

他ハサグリモトメラレルを  
ゆめなり

舒明紀 出之入畝傍山因以探山 著十三血つれらる小袖ありあや〜〜て  
りやく〜〜板敷をわ〜〜見るハ盛衰早二 今在所をあなぐら

あなぐら (俗) 字 竅 阿 留 靈 異 中 探 必

あなご

魚名 狀鱧に似て色浅し 頭より尾に至り  
小き白點ありて両邊相連る 其味甘平  
海蝦なり 長さ一寸餘 一手ハ小く一手と  
長大堅田えびの形の如し

あなごろう (土佐 俗)

魚名り〜の  
下小注す

あなごひ

ア、シタハシイの意なり 拾遺戀二 あなごひ  
〜〜人をもぐら〜のあ〜のき〜えか〜る

あなご (しんもまのらせ  
て〜がな)

あなご (〇あなご)

西北の風なり 散木上 あり〜〜を〜ま  
が磯の濱千鳥岩うら〜浪不立き〜〜なり

後拾遺 あなご〜〜せの塩あひよ船出〜

あなご

足の端をりふ 神代紀上 手端吉葉物足端  
凶棄物 字 忠 こと かしら〜りあ〜〜

た〜綾錦をた〜〜〜〜草木まで  
ま〜〜〜〜此れ〜〜〜〜

あなす名

子孫苗裔をいふ足端より轉じてなり  
顯宗紀於市邊宮治天下天萬國萬押監尊  
御褻僕是也繼體紀妙簡枝孫賢者唯男大迹王也宇嵯峨院國母大臣ひ  
とつ心してこそ事をもかひまじき臣下ども御あなす名あてやん事をなして  
物せらるるめをこそ又やん事をなした人の皆御あなす名をいふあなす名  
年頃つらうやうつらう琴つらうやうつらうと思心侍りてたまひもめめ  
あなす名捨て侍まじや

あなせ

せとらあなああの  
轉語なり

あなた

のあなたの春あやあならん  
あつたあつたあなたのあつたあつた  
源蓬生さるめたよ  
彼方の義アチラハウ又イゼンの意をいふ  
古今冬冬あがら空より花の散らうる雲  
人を呼称彼方の義あて名を  
さうぞうと敬まらるなり

あなた

あなたづ

アコロトナイの意方四草香江の入江はあ  
る蘆たづの痛多豆多頭思友なりよして

あなたあ

たあ天女の行未の子あ  
ことあああけま

あなたあ

あなぢ

催馬樂 呂の曲名  
安名繁  
痔疾ふよりして肛門のあなぢあ  
孔穴をなまもののなり  
アナドラルヤウナサマ又テガルニオモフサマを  
いふ榮浦々のた右進をいひるまあな  
の思食て父子相迎上我いときそくをめらあな  
づらあまきこく海なり 宇俊蔭  
日ああもあまきこくあなぢあ  
あなぢあ

あなづり

あなづり

源夕霧よとこのゆゆるぬ物よのさあなづり  
かあなづりあなづりあなづりあなづり

あなづりやまね

カシキ

軽しむる詞あり  
悔やまねたうり

あなづりやまね

カシキ

悔やまねたうり

落窪 あなづりやまねてらとこび 枕九侍従のきみかうとき  
るまうりわいとあなづりやまねりのを中納言大納言大臣わとどふたうり  
ぬまのむげゆ  
せんさあ

あなづりやまね

ハヒフヘ

悔りくまらひあり 今昔五且恥あ且い  
費づり咲ひく 力不及

あなづり

カシキ

同 ○ 悔

あなづりま

セシシシ

他きして アナドラセルを

あなづりむ

セシシシ

同上

あなづりら

セシシシ

他は アナドラセルを

あなづりら

セシシシ

我がねのづら他の  
悔らとらあり

あなづり

カシキ

悔てあるを  
りあり

源 タ良 これこそかの人のまね あなづり あやのまのまのわらあ

枕 二 あなづり あやの人の家の北 靈異上 費 アナ

たやま 悔りあり 太平三 武略 あなづり

あなづり あやのやあひとん吐田 原邊 わねの うら

あなづり

カシキ

同 ○ 悔

あなづり

セシシシ

他きして アナドラセルを

あなづり

セシシシ

同上

あなづり

セシシシ

他は アナドラセルを

あなづり

セシシシ

我がねのづら他の  
悔らとらあり

あなづり

カシキ

悔らとらあり

あなづり

あな

字傲又傲又侮阿奈止留古節侮

あなほり俗

五不女の一として人道通せ

あなほり○あなほり○あなほり

材木を組合て高き處に登る具なり和麻柱阿奈竹燕の巢の中のこやま具をとら

んとて人をあなほりひよのせせ

あなほりハコフ

上のあなほりの意として足かりを懸て助

續紀四張務阿奈奈奉輔佐奉皇朝穴際扶奉而

あなほり

エノスカナイなむらの意遊仙窟可憎病夜半驚源榮女むらのりやかね

や又尼かどの世をそむれたるあなほりもたふさうびつ物見は出たるも例ハあなほりなりやあなほりこも又柏木だく小讀をあなほり身やあなほり

あなほり○あなほり

あなほり歎辭あなほり美好の意やながらたのやし添たる辭あなほり万葉集小波斯邪

夜斯繼惠夜師なむら阿那途夜志愛表登古表記上阿那途夜志愛表登古表

あなほり

あなほりしと義同神代紀上陰神乃先唱日妍哉可愛少男歟云云妍哉此云阿那而惠夜

あなほりか

菜名かの下注す和生薑俗和奈波之加美

あなほり日向俗

魚名かの下注す

あなほり俗

虫名かの下注す

あなほり

アシノカフその下注す

あなほり俗

工匠梁柱等の穴を鑿つ者をらの又築する穴を掘る者をらの

あなほり駿河俗

獸名毛色黒黄四足短くして尻長し尾大めして短く目圓いてまるく體瘦て

走るくと飛鳥の如し○籬

あなほり

アミニライちり万三痛醜賢良を為と酒のまぬ人をよく見まるか推ふるも似る

あなや

あなゆむ マニム

あふ あふき。あふい。あふこ。あふせ。

許男命為冠弟而作堅其國  
仁賢紀異父兄弟之故

あふ

能虚呂望赴多弊耆氏箇區游交儀利破阿珥豫區望阿羅儒万三あ  
たひをたれたらしらるるひるきのみまきけふ豈まらるや

あふい 俗

冠小  
同

あふき 俗

同上冠君  
の義

あふこ

あふご 俗

草名漢渡あり和産未だ詳かりざらんが  
たきうの下論す康本丹參和名安  
仁久佐  
兄ふねをいふあねとさうと  
わづのさうり

あふむら

季の兄をりの大鏡今ひらりの男はその  
同ト帝の母ききの御兄むらとつらと

おきたり  
けり

あふもめ 。よめ

兄の妻をりの  
古節嫂

あぬらす カシスセ

足ぬらさるるあなり万十足沾くをひ  
とさけむるカ十あまのたは足沾渡

あね 。あねき。あねい  
。あねご

女兄なり原の女を親を尊とて呼稱あり  
女兄のさふなうらざらなり和余雅云女

子先生為  
姉阿和名  
称

あねい 俗

上小注  
を

あねき 俗

同上さるあねの  
きよおわら

あねご

宮有戀宮酢媛即歌曰阿由知何多比加弥阿称古波  
和例許年止止許佐留良年也阿波禮阿称古乎

女を親て呼ふ称俗言のアネゴと自ら別  
かり熱田縁起先是日本武尊於甲斐坂折



あ糸ご俗

同上のあひの  
ごおわ

あ糸ご俗

海鳥をり、形状鷓鴣の如く  
稍大全體灰黒色

あ糸ご俗

形色鷓鴣に似て背の赤淡緑、末黄色を帯  
ぶ脚淡黒色背の浅黒色腹深黒色あり

長毛無る、頭小灰色の長毛  
あり、又一種色白あり、

あ糸ご俗

姉の婿を  
りふ

あの

物を指し辨かめると云ふ同一竹あひのくた  
置あひのくたと讀て聞あひのくたせむれば枕女房の

局あひのくたなる人をさへあのねもと君をさあひのくたりて源空あひのくた蟬あひのくたを為すあひのくたゆもああひのくたら

あのがひ俗

介名形稍をり小似て小く敲厚一長一寸  
許其色黒褐斑文あり濃淡一様をさあひのくた大

なるとりだあひのくたー小なるとり  
こあひのくたり

あのごあ音

案の如くなり源あひのくたやむあひのくたのねあひのくたかり  
つあひのくたとあひのくたねあひのくたげあひのくたああひのくたのあひのくた御心

あまみ

け

あは

物を指し辨アレハかり新古雜上淡路あは  
あはとあは見あは月のちあはひあは所

あは

淡々と軽きやりの意源竹川對面のつあは  
てあは聞えんと待つ々奉りたるか

あは

ひも

ひもあはの御あはり

あは

五穀の一苗葉黍に似て一根一莖して一穗  
を抽づるの種類多し各名の下小出せり

記上故所あは神於身生物者云於二身生粟和粟阿波万十四ああはの

あは

さあはと同一多き意万あはの安  
幡あはなりとあはのあはのあはの

せあは

あはあは

シシシシキ

あは

淡々あはとあは又轉あは味あはの無き状を  
りあは又あは慮あはるあはるあはる

あは〜かす カリル 淡々〜あるをりか又轉して不遠慮

源 東屋 人ともあは〜 紫式部日記上

あは〜 和泉式部日記兵部卿も

御ふまな 狭二上一 鳥のやうゆめ

御ふまな 鳥のやうゆめ

人やあは〜む

あはらひ

粟の餃の

あはらう 俗

下注

あはらうどろり 俗

鳥名らりの

あはらうらた 俗

癪なる形状をりか或は

あはあ〜 俗

粟を炒て砂糖館を和

あはがひ 俗

海たる粧粉なり

あはがら 俗

看麥娘の一種 形大なる者

あはがら

粟の釋者神代紀上亦曰至淡嶋而 縁粟莖者則彈渡而至常世郷矣

あはがら 〇やがら

魚名やがらの下注 和梳齒魚 煉人云阿

古今其名を同まねども今呼所の者と同異未だ詳をらず暫同條とせれ

あはさ 刈シ

物のサツシタルサマをりか 淡白 以字 淡 童蒙頌韻 淡 源標 淡 ちのえなる事をた

あはさ〜あをれうたよ〜りぬ心も〜む

あはさ

かゝりの木の一名やう〜いひ或はあを〜り

紫日向之橋小門之阿波岐原而襖板也

神代紀上 憶此云阿波岐和憶 日本紀私記云阿波木

あはく カキ

土あ〜りひりた又物を ハタケル

あはかき セス

他〜てあがか

あはげうしむる

同上

あはげかるる

他ふあぢか  
るるの

あはげかるる

我がわのづから物の  
發るるをりかきり

あはげける

發てあること  
りかきり

續紀四若彼墳隴見發掘者隨即理歛勿使露棄賊盜律凡發塚者徒三年  
著上繩と持ちて云云とをりんとまきりんとまきりんと思ひく劔を抜て足をあむ  
らふかつら皆きりまきりまきりまきり  
類名撥ぐ掘ぐ

あはく

他の隠してわくこととホリテイフ  
かり類名詩古節詩

あはげかきるる

他をして隠してわくことと  
ホリテイセルをりか

あはげうしむる

同上

あはく

馬の勞るるを云ふ  
天台六十卷音義 蹄  
字 嘽 阿波久

あはらるる

草名のわららるるの下の論  
字 連 薊 阿波久佐形似保豆岐  
實似粟玉云伊太知波世

あはらるる

物のアツポキをりかきり又バットスルをり  
りか遊仙窟荒涼塵添埃囊抄五 荒涼ケハ

盛衰四十二大風ちれドも渡らる舟も通りわかんと思て打解  
あはらるるん所へまきりんと渡てこと敵をば誅せられ

あはどけ

庭間あ生さるる小草あて葉小く  
圓繁密あて苔の如く

あはしもの

方十二粟島之ありねりの故 吾ふよとを思ら  
方五 安波思麻能あはらるるとおのふらもあ

あはまらるる

麴草の肉色黄黒  
あはらるる者なり

あはす

自ら物をあはらるるを  
りかきり ○合又配

あはまきする

他をしてアハセサセルを  
りかきり

あはらるる

同上

あは

あはさるゝ レルレレレ

あはさるゝ レルレレレ

他ふ物をアハセラレルと  
我がねのづら物のアハセラレルと

記中 詠云伊奢合ヲラ十訓九時の笛あきども其音をふれあそむ人なうり  
けり 落窪三蔵人の少將を中の君ふあそ給つた又後ゆも思ひあひ  
さびげよあそふあうりあひわいとやあそひけん持明院基盛鷹狩記鷹をも  
あそふ鳥をもとりかづひがたあうり

逢の延たる詞をり方十八阿波之多流けふ  
をらめてかぞえわさかく常見むあそ

あはさる セシシシ

自ら物を合するをいふ  
かり○會又合

あはせさする セシシシ

他をて物をアハセサセルと

あはせしむ レレレレレ

同上

あはせらるゝ レレレレレ

他ふ物をアハセラレルと

あはせらるゝ レレレレレ

我がねのづら物のアハセラレルと

源繪合 まづ物語のねやかる竹取のおきなふらうりのと一かどをよあそ  
せと又明石思ひあそせらるゝとあうり寶物集この歌思ひあそせ  
上りて鼓を脇に挟みろ拍子をおて足柄は合せ歌たり

源 帚木いそまねたさうりに菊の露をかきまらよせわさうりのつきかたのと  
かきまらよせ太平十三天下ふ大かんむりをやりて四海の民を一人もわら  
思ひと

あはする セシシシ

めあそむまどどのあそむるあうり○婿又配  
應神紀於是天皇知大鷦鷯尊感髪長媛

あはせ セシシシ

あそむのきねの  
下小注き

あはせ セシシシ

飯の菜なり○下飯枕次ふあそむをこ  
なうりひつぎわねのいあうりわらうり

さうやうふやうと  
こゝて失やうと

あはせらと

よりあはせたる絲やう  
堀河百首水引の

あはせかぎと

あはせのりとの一筋は分ずよ君を思ふ心ハ  
ふつへの鏡を照しあり  
せつせつとあり

あはせがま 備前(俗)

果名、まきーがたの  
下注を

あはせがま(俗)

鶏魚の骨を去り二枚あはせせ  
炙りたるりのやう

あはせこま(俗)

あはせのきぬの  
下注を

あはせこま(俗)

鱧魚を合せあがり  
たふふあり

あはせなま(俗)

種々の香材を集め蜜を以て煉合せたる  
ものあり  
宇吹上  
みやうたね  
ねもつら女君  
頭中將志らうねのよもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら

あはせなま(俗) のを山のけたまよ作うて  
宇吹上  
みやうたね  
ねもつら女君  
頭中將志らうねのよもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら

あはせなま(俗) のを山のけたまよ作うて  
宇吹上  
みやうたね  
ねもつら女君  
頭中將志らうねのよもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら  
よもつら

合せたれ物しと云事を句の  
上下お置たる歌なり

あはせつら(俗) たれ

あはせと

細石黄土石灰を和し鹵鹹を以て搥りたるは  
盆池家の庭等を堅むる土なり  
三和土  
種類ハ各音の下出也  
砥 永正何曾合

門を両からたり  
あはせと

あはせのきぬ(俗)

つらとりのまがら衣服をりの  
和 袷衣(和名阿波世)  
和 袷衣(和名阿波世)

あはせん(俗)

粟粉を粉ふ和し扁薄して  
炙りたるものなり

あはせ(俗)

魚菜等をひくろ器お盛たるをりあ  
四時祭式 相盛(和名) 八籠(堅海菜雜腊鰻)

あはせ(俗)

黄土色(小象り) 藤黄胡粉(ゆて)  
合せたる色  
檀香色

あはそか

あけり淡々かたのあまみく心なり  
の意  
あはつと語意近し  
大鏡ハそのまじり

世お記し置きて侍るなまがらかか  
のしにらんあはつと申べなる侍らんと

あはた

下のあはた

あはた俗

痘瘡のあはた

あはたけ俗

菌なり黄色淡黒を帯襴なり  
針眼あり食料不入らざり

あはたま

ひざのあはたまの下注を  
和韻阿波太古俗 膝骨也

あはだつ

あはけい淡めて淡め惡む意なり未詳  
祝詞式鎮火祭 見阿波多志給津止申給氏

あはだつ俗

雲の深くたつとり古今墨成 うねめり

あはだつ俗

山のあはだつ慶雲法印集 山のあはだつ雲のあはだつ  
數へくうたつ晴ぬ五月雨のころ

あはだつ俗

粟粒の如く毛孔のたつとり

あはたつ俗

類名 皴皴體 皴皴字 鏡集 皴皮膚之皴也  
痘瘡の痕ある面を  
罵る語なり

あはだひ俗

棘鬚魚の片身栗粒を  
付蒸したるものなり

あはだつ枕詞

万十あはだつ 島あはだつと君をあはだつ

あはだつ俗

詞をふけり枕詞とあはだつ

あはつか

絲のむきびくたの名左右両綴あはつか 互  
み絲を通りたるものをあはつか

あはつけた枕詞

源常木あはつけた あはつけたあはつけた

あはつけた枕詞

淡々あはつけた 義又轉あはつけた 不遠あはつけた 慮あはつけた 事あはつけた

あはつけた枕詞

源胡蝶あはつけた あはつけたあはつけた

あはつけた枕詞

竹あはつけた 竹あはつけた 竹あはつけた

あはつけた枕詞

給あはつけた 給あはつけた 給あはつけた

あはつけた枕詞

新撰字鏡あはつけた 阿和豆

あはつけた枕詞

物あはつけた 物あはつけた

あはつけた枕詞

類名 徇あはつけた 徇あはつけた

あは福をま カシスセ

あはのりひ あひひ  
あひひ

あはのりりあ 俗

あはのうる一孫 うるあひ

あはのからん

あはのほりひ 俗

あはのさぶあ 俗

あはのもち もちあひ

あはのもち 俗

あはのもち あひもち  
あひもち

自らあを多くまををりあ

類名 糴辨 アハネ 糴を炊たる飯なり 糴 糴根源 糴がらを

座として糴の飯を奉る

粟をりて粉め 志たる麴なり 粟粟の粉をりて 本和 粟米 宇留之粉

あはのさむひの下注 御湯殿記 永徳三年 正月

十五日か 糴 糴を造りたる糴 糴 糴子糴各二升

粟の糴米めて煉

粟粟の粉 本和 糴 乃毛知

次小

あはのさむひ 糴 糴を造りたる糴 尺素往來 粟餅 黍餅 云云 十鉢

あはのもち 俗

あはのさむ あひあひ  
あひあひ

あはのれ

ぶき時の中も

あはひ

のたてもくぐらるあひひより  
見通さきもあひひなり

あはひ

もくかぐらるあひひより  
なからぬ御あひひなどりひより  
こらとやういふ

あはひ あひひ

吾粟卷三

あは

。十四

粟の糴米

粟の青を帯たるものなり

本和青梁 宇留之粉

あはのさむひ 七十番職人歌合 ひとり  
糴のかきもまらぬあひひのうら忘る

間の義あひひ 伊勢尾張のあ  
まひの海づらを行は蜻

人と人との中の交り 源 桐壺 か  
づね給ふ四の君あひひを奉りあひひ

又紅葉賀 似つてはからぬあひひ

介類なり 一片あひひを對なり 大なる者尺  
み至る小なる者二三寸殼の側み十餘の

乳形のものあり、只六七孔を通じ、肉青き雄、赤褐色なる雌あり  
○石決明允恭紀差項之出曰於海底有大鰾其處光也賦役令鰾十八行  
本和鮑魚和名阿和鮑  
一名鰾和名阿

あはびーらたま

屢能摩能阿波  
寢之羅陀魔

あはびたけ

酔和和と喰味稍あはびふ  
似たり、八九月生ず

あはびたま

あはびのえんあはび

あはびのかひやれ

あはびの腸を播り炙となし肉を切片ふ  
し、其中ふ入煮たるもの、  
あはびを其殻の中ふ入  
煮たるものなり

あはびのやたらかよ

あはびのまねふ

あはびむきむき

よりの名

あはふ

あはぶ

あはぶ

あはぶ

撰集抄むらぐもる虎の合てらひ奉らん  
けり云云錫杖とあはぶりけり

あはば

粟の穂を  
らふ

蘿蔔を以て敲きて煮たるもの  
其肉柔なるゆあふり

石決明の腸を和し  
煮たるものなり

檜扇の絲の餘りあはびを結ぶむきむき  
かこたり結びめの状石決明に似たり

粟を植る地を云記中美都美都斯久米能  
古良賀阿波布余波和日本私記云泉田破ハ  
粟の如く黄色を付  
たる麩筋なり

物をさくたきとく  
カバフなり

物をカバヒテアル  
なり



あはば俗

草名とりのあはば下注

あはばた俗

鳥名とりのあはば下注

あはむムムムム

疎之悪む意をムムムム

あはめセシシシ

他をウトミニクマセル

あはめムムムム

同上

あはめムムムム

他ウトミニクマセル

あはめムムムム

我々のぐら他ウトミニクマセル

源帚木あはめムムムムと式部をムムムム給ひムムムムあはめムムムムと奉るムムムム心ムムムムをムムムム又ムムムム空蟬をムムムム給ひ

あはめ俗

あはめのひ下注

あはめん俗

粟の粉麩條を作下注

あはむ俗

あはむ下注

あはむ俗

あはむ下注

あはむ俗

黄白色粟を製成形圖説粟盛

あはむ俗

粟製成形圖説粟盛

酒云云一説は瓶入り時お泡立て盛をあはむを以て名付しと云ふ

あはむ俗

糰糰を包て炙りたるのなり

あはむ俗

小屋和亭人阿波良

あはむ俗

あはむ伊

あはむ俗

あはむ下注

あはむ俗

あはむ同ト

あづらや

亭の下よ  
注ま

あづらや

あまきつら家きつらの夫卅峯さたる風かきうり  
せむあをらやの軒は木の葉を誰うあうや

あばり

あまきつらの  
下注ま

あばる

屋かどの荒たるをりあうり 宇俊蔭中 草  
のあひさして家のあをらまは 堤中納言物語

あはま

あまきつら家きつらひとりながさく  
てあをねくうけまがそのを帝あからせ奉らむとく  
夜樂とのあ身あをさそあめり時あうり  
さうさう声かうりそれかひうりの詞あうり

あはま

あまきつらあまの歌のあまや  
隣さかる状をりあうり 後三年記 年のよ  
さうの事あまの事あま侍る哉

あはまが ㄅㄅㄅ

あまきつらあまのあうりあはま  
むよあまの ○憐

あはまがさる ㄷㄷㄷ

他をアハレマセルを

あはまがさる ㄱㄱㄱ

同上

あはまがさる ㄴㄴㄴ

他はアハレマセルを

あはまがさる ㄷㄷㄷ

我がねのぐら物のアハレマセルを

金葉上 今昔十七 身は戒行を持て衆生を哀ぶ事佛の如し 遊仙窟 憐愍  
以字 憐アハ 發心集三 となあまらねあまらま

あはまがさる ㄷㄷㄷ

あまきつらあまのあうり  
おひあうり

あはまがさる ㄷㄷㄷ

他をアハレマセルを

あはまがさる ㄷㄷㄷ 同上

あはまじびらるる

他ハアレマレルを

あはまじびらるる

我がれのうらり物の

加茂保憲文集 ひうりをよめをまじびむとありて大鏡ハ神さうあをまじびさせ給ひく又れのまら迄るめぐるあをまじびらるるを侍る

あはまじび

○隣

あはまじまする

他をアレマレルを

あはまじまする

同上

あはまじまする

他ハアレマレルを

あはまじまする

我がれのうらり物の

古今序 霞をよめをまじる露をわがしるふ心こころおわく源若菜下 女の春を隣むころる人のひあを侍けるげまきかん侍りける後拾序 花をめくあまじび鳥をあをまじまじとこのことなり本願抄 上末 悪道ふおちかんとまじるをあをまじれすむがたあふ

あばまじもの

縦ハ暴行をまじる

あばまじる

人の無法おまじる

あひ

相の義相言相戦相殿

あひ

彼と此との中間をの山間

あひ

能の一番中前後の間は出る人を

あひ

鳥名あひらの

あび

鳥名あびらんは似る

あひあか

婦人禮服の赤衣の下は着る紅あやをまじの袖をよりよりあひあかとらふ

あひあふ

よく物事のうらああをりめ又よく似あひたるをよりより

あたる世の人のあをまじるをまじる  
かゝるまじり

あひりん (俗)

かまてこれと合まる為ふ  
押さるるの印なり

あひうち (俗)

相撃の義互よ  
撃るるなり

あひうづち (俗)

愛しあふことをなすの意なり  
天坐神地坐神乃相宇豆味奉 (○大嘗祭式)

小皇神等相宇豆乃奉  
うづちの轉語なり

あひえんきえん (俗)

合縁奇縁の意にて互ふ心あひたるどちを  
りふ轉じて縁づくとり小意なり

あひおひ

互ふ相追の義にてマケオトラスの意なり  
古今序 たちささきみの江の松もあひあひの

やうや  
おびえ

あひおび (サシスセ)

思ひあつを敬しそり  
源総角あひおびせ  
よしこころうつくつたれ人の御さすなり

たまふ  
なまよ

あひおひ (ハヒフヘ)

思ひあつを  
りふなり

あひあへる (ヲリリ)

思ひあひてあつを  
りふなり

あひがらふ (ハヒフヘ)

晴三我をさきまふあひあへり  
思者大寺の餓鬼のあへるはぬ

あひがらふ (ハヒフヘ)

男女たがひあへり  
万九 万九の神の女よたがひなり

あひかたむ (ハヒフヘ)

物がたむ  
詞花戀三 女を

あひがも (俗)

野鴨と鴨と交て生める子をりふ又  
其月食用よき鴨をりふ

あひがも (俗)

鳥名あひがもの  
下注

あびき (俗)

網を曳て漁する人をりふ  
職負令大膳職  
云云 雑供戸 類也

あひき (俗)

あらしをひちやくをりふ  
各競つすなり

あひき (俗)

あらしをひちやくをりふ  
各競つすなり

あひ (俗)

あらしをひちやくをりふ  
各競つすなり

あひ (俗)

あらしをひちやくをりふ  
各競つすなり

あひくた俗

木と木とをつた合まざる釘なり

あひくも

口を張て齒を鬼もどちり和 歎屑阿比知

あひくも俗

鐙を短刀をりふなり

あひくも俗

中よれ人をいふよく語の合ふよりりたる詞なり

あひくもあひハヒクヘ

同意ふをうとりの祝詞式道饗祭櫻園底國典利鹿備疎備來物ハヒクヘ 相率相口會事無

あひくもあひハヒクヘ

同意ふをうとりの祝詞式會祭天策麻我都比登云神乃言ハヒクヘ

武惡事ハヒクヘ 相麻自評和相口會賜事無欠

あひくたあひハヒクヘ

谷へあひをいふなり多武峯少將物語聲たかくあひをいふなり山彦のあひくもあひ

あひくも

人は會て共寝さるを云あり伊夜ひくと夜酒のほろもあひくもあひくもあひくも

あひくも

酒のほろもあひくもあひくもあひくも

あひさかめヒコヒコ

榮えあひを云なりカナム 天地と相左可延

あひくも音

卒と大宮をつとふなりカナム 天地と相左可延人の生年と五行は配當一男女の縁小相生相尅の義ありとして吉凶を考るを云

相性の字を書けり

あひくもハヒクヘ

自ら應接をうアシラフとおなり源若紫

狭三 おもむくもあひくもあひくもあひくも

あひくもハヒクヘ

あひくもあひくも

あひくもハヒクヘ

あひくもあひくも

源帚本 かくもあひくもあひくもあひくもあひくも

あひくも

軍中にて敵味方などねやうは代る志ををり古節相驗

あひくも俗

婦人禮服あひくもの條見合まべり

あひだまき ○どうまき

御かゝるまきばうらかまひ  
てもわりなんぢがねさう

相住の義ひとつ所は住まらふ源王葛あひ  
まきまきのびやふ心よもものたまふ

あひまむ マリムレ

あひまむ 侍うけまむ

上小同ト後拾雜をばさうける人のあひ  
まむけあさう琴の音まげめのだめか

あひそふ ハヒガレ

あひそふ ケリルレ

そひあひとつふ  
そひあひとつふ

源帚木あひそふもあひまむとあひまむ  
そひあひとつふもあひまむとあひまむ

あひだ

あひだ

彼と此との中間の所をいふ宇樓の上一生  
のあひとつふ歌をもよほす

又上問あひとつふぬる緒もつるよとあひとつふ後あひ物を  
間断の意齋明紀阿須箇我播添難蟻羅  
都か喻矩添都能阿比郷謨難俱母於母保

あひだ

ホドの意記上乃生滿天是據食之間逃行  
拾遺表あひとつふの中心細く覺るる常な

らぬさち侍々も公忠朝臣のわとあひとつふ遣一ける此あひとつふ病おも  
くなりあけり貫之集相志とつふ人の物へ行は馬のともあひとつふあひ  
だよ雨あつてえのむ成よりも無盛集旅人あひとつふあひとつふあひ  
とつふ宇樓望まむあひとつふ事國々あひとつふあひとつふあひとつふ聞  
侍りつるあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふ  
源帚木あひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふ  
成侍りあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふ  
あひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふ

あひたい たい 音

あひたい たい 音

あひたいのたね 俗。あひとつふ

あひたいのつゝ 俗

あひたがひ 俗。あひたがひ

彼と此と對ふをいふ本義とて轉りて  
他人を交へる二人とて事を計らふあひとつふを云  
逢ふわい思ひあひとつふを

男女情慾は堪へざるを共  
死るをいふ○情死

あひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふ  
事を為したるあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふあひとつふ

相互の義

あひだがり㊦

縁族をりふ

あひだなま

ケケル

たきまわつてりやま源若菜下猶あひだ

あひだちた

ケル

あひだちたは同意間無の意委ワケハテナキ

あひだちた御こと

たもちた御こと

たもちた御こと

あひだふれ

ケル

間斷あひだちた方四無間あひだちた草すくたびふる君かつたあひだちた

又上かさをしたるつぎふのあひだちた

あひたのむ

ケル

たのむあつてりやま源若本やうく人と

たのむあつてりやま

あひぢぢぢ

あひぢ㊦

阿鼻の無間と譯す苦を受るるのあひぢぢぢ阿鼻地獄

あひづ㊦

ケル

烽火又物音をあひづ事を知らるる

あひつり

二月丙戌鑄錢司用乘銅鑄進新錢一千四百貫云云

あひづら

たがひあひづら都合する鑄とりの東北院職あひづら月

あひづら我とおとらぬもの相槌を

あひて

相むあひてものごとをまゝ人まゝあひて

あひてつぎひのあひて

あひぢのくわ

同ト社の殿内あひぢのくわ合せあひぢのくわ神をりや

神名式伊勢國度會郡大神宮

三座相殿坐神二座

あひとふ

ハヒフ

詠あめをりあひとふ事繁不相問あひとふ先

あひとぶらふ ハロフヘ

諺ひあつとりのあひとを同ト源手習其  
女人ふのたびまかり出侍りつるたうらふ

小野は侍るあひともあひとぶらひ侍らん  
とくやかりよをたうらふ

あひともなふ ハロフヘ

伴ひあつとりのあひともなふ 續拾神祇  
四月京極入道前關白後二條關白大臣の

侍りけるをあひともなふハロフヘ加茂社  
すうせける時讀侍る

あひなれ カシキ

間無の意音便よあひなれカシキの  
かゝる意和泉式部日記御あつとりのあひなれ

あひなめまつり

相嘗祭同トあひなめまつりの  
まつりの條は注よ

あひなると カシキ

伊とつとりのあひなれ  
たる女やうりくことなれ

あひよあひて

事物のうらあひて 古今戀五あひよあひて  
物思ふ頃の我袖よやがる月まぬ顔なる

あひぬる カシキ

共は寝るを 万十三たふあひて相宿物乎  
をやまだの田るる

あひのきやうびん 俗

能の一番毎の間よある  
狂言をり

あひの 俗

驛と驛との間よ休息する  
家やどある里をり

あひの カシキ

酒かど飲あつとりの 万六かへらむ日  
相飲酒をこのとよ

あひのり

あひのりの  
體言

あひの カシキ

車かど小乗あつとりの 源葵人よあひ  
のくまがたをたよあげ給よめを

あひなると カシキ

互小離を別るを 伊男も女もあ  
ひなるとね言つとよなむつをよける

あひびれ

軍陣かど相とりのあひびれ 太平廿信濃  
勢二百よきうねをよせよ二百よれ

あひ引よ左右へ  
さうとひ

あひびれ 俗

襪のゆらと  
り

あひびきものを 俗

鑑の引合の  
緒をり





あひむき ハヒヒ

まきれそひく相結婚  
一けりといは

婚ふをりのあきりよまひの情と通さるなり  
万九らぬをささうなりあひをささるのあせられた

あひよめ

兄弟の妻をよめ  
和姉姪 阿比

あひよる カヒ川

寄あふをよめ 万十四 ひろくたはけあへ紐を  
我せをよ阿比與流とくもよるとをやせに

あひる 俗

次注

あひろ 俗。あひる

采少一又純白又純黒の者あり足ふ躑ありと  
潤一故子足ひろとつよ〇鶯

尋常の家禽とて其形鳥に似て大なり  
雄の緑頭鳥に似たり雌の黄斑ありて文

あひむね カヒ川

逢てひきくわをよめ 大和 人のめとありける  
月をささうなり 後撰秋中 女郎花をよめ心の

あひるむ カヒ川

咲あふをよめ 万十六 むらねる春のうらめ  
あかしくつよめ 恵美天 婆とほしめるあやも

あふ ハヒヒ

事物のかれこも共なる  
をよめ〇會又合

あへる カヒ川

あひくをよめ  
つよめ

あふ ハヒヒ

上の意の轉じて我ら他よ出  
あふをよめ〇逢又遇

あへる カヒ川

あひくをよめ  
つよめ

万五とほげいのからせもあしぞれたるなりなふ安布のせ安散流きと  
あふ 古今戀三 戀のあしむもあしぞれたるなり あふをよめ つよめ

あふ ハヒヒ

上の意にて男女の  
婚合とつよ

あへる カヒ川

あひくをよめ  
つよめ

記上此御子者御合高木神之女萬幡豊秋津師比賣命 後三年記 頼義  
むじ貞任をうたんとてささるの國へ下りし時旅のかりやの内あきか此

女よあひて  
けり

あぶ

あぶがまの 加賀<sup>俗</sup>

あぶぎ 。かきわり。せんま  
。ま名ひろ

あぶぎあませ

判者ありて勝負を渡さるをり 金葉秋太皇太后の扇合は月の心をよ  
める盛衰<sup>三</sup>今様朗詠の興あり 扇合繪合すも忘る御隙をり

あぶぎうを 安藝<sup>俗</sup>

あぶぎかけ <sup>俗</sup>

あぶぎがひ <sup>俗</sup> 。あまこ  
。あまこ

瑩白外色微褐大瓦隴  
五行あり○車渠

虫名、あひの下に注す  
和名、あひのこ、飛蟲也

魚名、あまのこ  
下注す

疊扇なり竹木を骨と紙帛を  
貼りてたれり 和扇阿布

方人を左と右よりけおのり 扇を  
出し或い詩歌をよめをよめて合せ

魚名、あまのこ  
下注す

扇を壁柱をふかき人料に設る  
罷りて席上の飾なり

琉球より来る蛤類の至大なる者其形横  
小長一尺許なる者の厚一寸許内色

あぶぎがひ <sup>俗</sup>

あぶぎが 。あぶぎのび

あぶぎけり 刈刈ツテ

あぶぎたやぶ ハビガベ

あぶぎだるん <sup>俗</sup>

あぶぎちらん サシスセ

あぶぎなまび <sup>俗</sup>

あぶぎのわぜ 。あぶぎのてせ

あぶぎのわぜ むらさきのわづきの風の  
なつーたふ

あぶぎのわぜ

介名あぶぎの  
下に注す

扇は貼る紙を云千載 源上三條女御遣世  
の後あぶぎは月出して遣侍るとして

燈火をどあぶぎ消さる 狭火をわ  
ふぎけり障子ぐらふをよりたふ

尊敬シテアリガタガ をりあがり  
よあぶぎたやぶ奉るあがり

扇の如く開きたる  
櫛をり

物をあぶぎてちらんを 源上三條女御遣世  
あぶぎてけりあぶぎてあぶぎて

伊豫松山の産本狭く未廣く  
形扇の如き茄子なり

扇を揺りて生せ むらさきのわぜをりあがり  
永久四年百首 手なまけり

扇の骨をわづむる具をり 又ハ金物  
を用ふるなり蟹目の義なり 平家上弓

つゝかりとまきばうらひひく程よかりとてあつぎの  
かちとんより上一寸をかりとてひあつとらきうたまひ

あつぎのてらげ

扇の風の下に注を惠慶集あつぎすあを  
六月の日をてら扇の手風ぬくも有るな

あつぎのぢがとち音

あつぎがぢがとあつぎ  
ぢがと地紙の義

あつぎのつま

扇のつまをり散木中かく

あつぎばふ俗せんま

扇子を箱ふり足赤の臺よのせく  
贈り物に用ゐるなり

あつぎびやうひやうし音

扇をうらう歌のひやうしを取るとらふ  
宇藏開かの扇びやうしとてまやにかい

ひきて立給へ桐火桶雲の上人西三人赤出てあつぎびやうしを  
一ツニツうらまきびやうたうらぬやうにうらうら吟たう

あつぎさるしし音

上をアラムキテ見ルをりあつり神代紀下因以  
仰觀有麗神今昔即ち虚空よ昇て十

八變を現老母是を見て  
起居て仰ぎ見る

あふ加加ケ

尊敬するといふあり古今序のあへへを  
あふきて今とてひびらぬか

あふぐ

上を向くといふ源人志まぬ思の心笑も  
せら色哀とめらち獨ごるわ何事ぞなど

あつぎのつみき何事あつぎのつみき又明石のゆき  
あつぎのつみき童蒙抄あふ

あふ加加ケ

扇をどあつぎあふぐなり源東屋あせふひ  
たしてあつぎあつぎのころあつぎあつぎ

あふぐ

清氣の天よのむらさき神代紀上精妙之合搏易

あふぐ俗

泡の下注

あふぐ

水名、移その  
下小注

あふぐ

物を荷ふ和和名四時祭式扱扱

あふぐ下野日光俗

扱下學扱扱也日本之俗呼擔物扱扱

あふぐ古今誹諧人戀ることをあつぎとてあつぎ

あつぎをなつぎとてあつぎとてあつぎ

あふぐああ

あふ



あぶさる セスル

釋尊よあぶせ奉り  
事を申なり

自ら湯をど アビセル をらふあびさるの轉  
たり 公事根源中 天龍下て水をとる

あふち せんぐん。あまのき

を結ぶ本和練實作練音義  
布知をりへよう名へくややわ

葉形南天の如く、鋸齒光澤あり、夏月五瓣の薄紫の小花攢り開後四五分の圓き實

あふち

あふちげら

あふちろ

あぶなれ カヲ刊

あぶなかる カヲ刊

無名抄下 勝負さきうら わいはあぶな  
かあ わあ

危くあをそ  
り あふち

砂石集 三 あぶち あふち 命

出法師落書

あぶる

あぶぬ カヲ刊

一つあ 三ああぬ

あふのき

心のち あふのき  
山田の三郎 あふのき  
あふ あふ

あふのきの體言あり 宇拾三 例のひりり物  
山より池のうへを あふ 行く あふ あふんも  
引 あふ 射たり あふ 承久軍物語中  
草あひ あふ 底も見え あふ 所へ馬の

あふのき

あふの カヲ刊

あふひ

あふひ

あふひ あふひ あふひ あふひ

アヲケザマ あふひ 曾我物語 あふひ  
あふひ あふひ あふひ  
衣の重の色目なり 桃菜 胡曹 表  
薄青裏薄紫

加茂の祭の日、  
頭小挿簾ニ掛

なごそ、細辛の双葉あるものをかりひきのひくひきの下見合きと  
宇樓の上 四月やうりの日あふひつらいつわくつうらうらうらうらうらうて  
源 葵 かざりける心ぞあやふ思わゆる八十氏人よたんとくあふひと 枕三  
あふひいとをくし 祭のさうり神代よりくくくくくとかきけんひんはくう  
りせれ

あふひ

かんあふひ。あふひ。  
〇あふひ

葉錢葵に似て五山ををくと細鋸齒あり  
互生す花白くしを微く黄紫を帯ふ又錢  
葵に似く細子を結ぶ子を藥用とす 大膳式 葵半把 艸  
本和 冬葵子 和名阿布 和名葵 和名阿 比乃美 比

あふひ

草名からあふひの  
下注す

あふび

御酌あり候へを打あふびの  
二ごんめを御口およめて  
石決明の下注す 大草相傳聞書あふびの  
ちべ長八寸計又出陣御肴集養の事云云

あふひぐら

東京俗

あふひぐひ

花戸の称をさひる  
がりの下注す  
狀魚小似て紋脈  
双葉細辛小似たり

あふひごき

あふひごけ

〇翠雲草

あふひつこ

ありけるかな作りうたな 次将装束抄  
あふひつごの太刀も不可憚  
あふひつご

あふひまうり

の葉をかつるを  
めくまうり

あふひまめ

あふひい

あふと

四月の加茂祭をりし 此日祭小あふひか  
人の冠す物見車棧鋪をふ 双葉細辛

三河の産菜豆の類實の大き四五分紫色  
の羅紋ありし 形細辛の葉に似たり  
人小尊大あふと

〇押柄

馬は騎は足を踏かづる具あり  
和名阿 鞍両邊兼脚具也  
和名美

あふもあふも俗

紫陽花の常種より花  
少く着ものなり

あふもがしら

頭顱の形ち後の方ふき出たる人むら  
宇拾士かいらのあふも頭あふも頭あふも頭あふも

あふもがしら俗

あふもがしら俗

鑑の形たる瓦をいふ  
和花瓦鑑瓦也加皮良

あふもがしら俗

介名蚌に似て殻厚く形  
馬鑑の如く白色なり

あふもがしら俗

近江大津の産油菜に似て大なり根扁  
て圓經七八寸根の先三尾ありて鼎足の

あふもがしら俗  
如し故小まきりかぶらに  
名あり○九英蔓菁

あふもがや俗

近江より出る  
蚊帳をいふ

あふもがしら俗

近江より出る麻のきり布なり他國  
より出るものあれと近江を以て上品とす

あふもがしら

馬の身小鑑のあふもとをいふ  
和兼鑑肉俗云阿布  
美須利

あふも

催馬樂 律の曲名  
逢路

あふものしら

いふあふものしらとをいふ  
なり東西市式鑑鑑隠

あふむく俗

いふあふむくとをいふ  
他をいふウラムカセルと

あふむく俗  
加判加判  
セシセシ

あふら

胡麻油菜罌子桐等草木の  
油をいふ和油和名阿  
布良

あふら俗

鯨鯨牛等の脂を  
いふ和脂和名阿  
布良

あふら俗

虫名あふらぎらちまうの  
下注を

あふらあげ俗

あふらあげの  
下注を

あふらぬち俗

菌名薄淡紫にして涎滑あり結縷の  
間小生する小菌なり

あふらい俗

美濃國河邊に産す黄色ゆくと  
油の色小似たる石なり



あぶらり(俗)

美濃赤坂金生山中産す、黒褐光澤ありて、油を塗たるが如し

あぶらり(俗)

油色の小石、米中お雑まるものをいふ

あぶらり(俗)

石炭の下お注せ

あぶらり(俗)

魚名だがら注せ

あぶらえ(南部俗)

荏の下お注せ

あぶらね(俗)

土類、ワケウツらの下お注せ

あぶらね(俗)

石名、状青田石小似て柔く淡緑色ありて、黒き斑點あり○冷滑石

あぶらか(俗)

油を引たる紙をう両を去るのぐたのめ用るもの

あぶらか(俗)

油を納るわ注せ

あぶらがや(俗)

和油瓶和名阿布加米

形注せの如く小く黄緑色ありて厚く滑

わら夏月莖を抽て穂を出き、蜀黍の穂小似て黄赤色○蒟草

あぶらぎ(播磨俗)

木名、あぶらぎりの下お注せ

あぶらぎ(俗)

のぎく、りやぎく、せんがんぎく

山野お生ゆる一種の菊ありて、莖葉淺緑色、小黄花を開く

單瓣短くして心大なり○苦蕒

あぶらぎ(俗)

尾張(俗)、あぶらぎ

蝨斯の褐色をいふ、その善く鳴く其

聲ギーストヤと聞えて機織の聲の如し

あぶらぎ(俗)

油を塗つたものあり類聚雜要重硯箱敷物料油縮注せ

あぶらぎ(俗)

あぶらぎのさ、どくえ、どくえ、どくえ

狀桐の如く、葉三尖或五尖七尖、鋸齒を、實八九分圓扁、連続子の如く、實を榨りて油を取るとのなり○罌子桐

あぶらぎ(阿波俗)

虫名、あぶらぎりの下お注せ

あぶらぎ (俗)

食類 あぶらぎの

あぶらこ (俗)

魚名 あぶらの

あぶらご (土佐俗)

魚名 めだごの

あぶらこき (カシカ)

油氣のつよさをいふ

あぶらこまき (俗)

新猿樂記 油濃物

あぶらこだひ (陸前仙臺俗)

魚名 りびだひの

あぶらごま (俗)

胡麻の黄色なる

あぶらご (俗)

油をいふ

あぶらご (俗)

桶にある油の升数を知る

あぶらご (俗)

あぶらごの

あぶらご (俗)

草名 あぶらがの

あぶらご (俗)

油を搥る

あぶらご (俗)

あぶらごの用ある障子

あぶらご (俗)

鳥の尾の肉なり 和膠

あぶらご (陸前仙臺俗)

草名 らんごの

あぶらご (俗)

油をいふ

あぶらご (俗)

油を盛る皿なり 和燈盞

あぶらご (俗)

門の根本中堂の内陳 和山鳩

あぶらご (俗)

人の肉の肥々 艶のあつさをいふ

女の子の白きを見て通をいふ

女の子の白きを見て通をいふ

あぶらつこた 俗

あぶらつこたの  
同

あぶらつが 俗

油をりき  
壺わり

あぶらて 俗

臍の出る  
掌わり

あぶらな 俗

あぶらな 俗 一種葉色濃く莖紫を帯ぶ  
其子を採油を搾るものなり ○ 芸莖

あぶらぬきびとのま 土佐俗

木名だもの  
下小注も

あぶらねがら 丹波俗

虫名あつわりまの  
下小注も

あぶらのひら 俗

市あぶら油をうるませわり  
東西市式油壺

あぶらのき 近江俗

木名あぶらぎりの  
下小注も

あぶらのつこ 俗

宮内省の被管わり  
職員令主油司

あぶらむえ 備後俗

魚名あぶらむえの  
下小注も

あぶらまぜ 伊豫西條俗

魚名あぶらまぜの  
下小注も

あぶらまぜ 津輕俗

魚名あぶらまぜの  
下小注も

あぶらび 俗

燈火を云「万六」安夫良火のひらふ見ゆる  
和らぐらまぜりの花の名まぜりたか

あぶらふ 俗

魚名あぶらふの  
下小注も

あぶらう 俗

細砂の青く微黒色を帯るもの  
臍潤あり故ふり

あぶらま 俗

物稱伊勢國鳥羽或ハ伊豆國の船詞ハ二  
月十五日前後ハ一七日わどらまぜり

あぶらま 俗 吹く風をあぶら

あぶらま 俗 吹く風をあぶら

あぶらま 俗 吹く風をあぶら

物稱畿内及び中國の船人の詞ハ四月未  
の方より吹風をあぶらまぜり

あぶらま 俗

脂の多き魚肉  
をどふり

あぶらま 俗 東京長崎

虫名あぶらまの  
下小注も

あぶらむ俗

虫名のひの俗の  
下小注を

あぶらむ俗

虫名まぐねむ俗の  
下小注を

あぶらめ俗

魚名まろ俗の  
下小注を

あぶらめ南部俗

魚名めだ俗の  
下小注を

あぶらもち

公卿参内の供、又、行列をさぶ油持とを  
さぶら車俗の軸俗を油俗を持俗く役人俗を俗

あぶらもち

古、燈油の事を掌俗る女官也  
中務式燈守四人

あぶらもち

容飾の具髪を潤俗せ油を俗り俗

あぶらもち俗

和澤和名柳和名良和名俗用脂俗二俗字俗  
荏子の油俗、密陀僧俗定粉俗等俗を加俗へ煉俗りて  
彩具俗を加俗へ、漆器硝子等の上俗に画俗くもの

かり其油を俗る俗の  
油俗と俗い俗ふ

あぶらむ俗

油を俗る俗の  
桶俗を俗り

あぶり

あぶりに俗

馬の脇を覆ふ具俗を俗り俗俗俗ア俗リ俗と俗い俗ふ  
和障泥和名袴和名飾也

あぶりに俗

餅俗を俗り俗と俗い俗ふ  
竹籠俗火俗を俗入俗て衣服俗を俗り俗

あぶりに俗

加シ俗知俗セ

あぶりに俗

加シ俗知俗セ

あぶりに俗

あぶりに俗

やれ俗もの

あぶりに俗

やれ俗もの

あぶりに俗

やれ俗もの

あぶりに俗

やれ俗もの

年十一月九日太政官符、美作伯耆等國申請官符、押領使勤行、警固、支配、此國在二境之中、暴惡之輩、任心横行、自非官符之使、何、執惡之徒、

物を火俗あ俗り俗あ俗り俗や俗り俗や俗り俗沙石集俗火俗を俗り俗あ俗り俗や俗り俗と俗い俗ふ

あふる へガリル

馬をアヲリスメルと云 躬恒集 おと馬いあ

たふら

あふる へガリル

今合の意アハセルをりあなり 記下 麻那波

あふる へガリル

志良表由岐阿閉源洋舟人めをえとらり

あふる へガリル

物を下リアセマセルをりあなり 和 齋 阿倍毛乃

あふる へガリル

後撰 雜 二 ちわとりのあはるもからん世の

あふる へガリル

物を下リアハセテフルマフをりあなり 仁徳紀

あふる へガリル

變高麗客於朝 〇和名抄 齋 齋 齋 齋 齋

物を成をりあなり 續紀 二 多能

あふる へガリル

物事を成をりあなり

あふる へガリル

あふるの條見合まなり

あふる へガリル

火をく物をあふる

あふる へガリル

他をく物をアブラセルを

あふる へガリル

他小物をアブラセルを

あふる へガリル

焙りてあふるを

あふる へガリル

りふなり

あふる へガリル

字鏡集 溜 孫知何

あふる へガリル

源 槁 姫 行 きをり遠き

あふる へガリル

あふる

の...てげふ世を...  
さ...て世ぬわが...  
あぶきもの  
ことうち囁  
ありけを

あぶらろど

西京俗

あへ

天御饗之時又作足一騰宮而獻大御饗  
雄略紀命臣連裝如饗之時

あぶらふももち

俗○まかこもち

あへぎあうく

加和列ケ

あへぎもぐらふ

ハロコヘ

〜てまぐ此車のまぐと  
〜〜〜笑給ふ

虫名ありやれの  
下注と  
あめるの體言トリアハセテチソウラスル  
○饗記上水戸神之孫櫛八玉神爲膳夫獻

あぶらろど

あぶらふももち

あへぎあうく

あへぎもぐらふ

あへぐ 加和列ケ

らをのたゆひが浦ふ  
類名喘息アヘギ

あへぐ

指で彼まの誰ぞ時ふ  
館小馳着たまふ

あへらふ

ハロコヘ

心ふのま...あへ...らひむ給  
めま...らむ...  
そま...あへ...ひ申...  
源帚木中將のこのことよりきうそむ  
紫式部日記ゆ...  
續世繼三法文小あをせつ

遊仙窟應答又會

あへぶ

持コタヘヌコラハラレヌかり事物不堪へさるを  
のふ万十五秋さまを置く露霜は安倍受  
て...の山...ぬらん  
ゆへ定めぬ我を悲き後撰戀四秋とて今にかぎりの立ぬらん思ひふ  
あへぬ物なら  
ちふ

吾景長三

あへ

あへど

上の意にてシアフセヌデキヌカリ不能の意肥前風土記釣年魚男夫羅釣不能羅之

古今春下 櫻花とく散ぬともわりのをぞ人の心ぞ風もふれぬ 又秋下  
山河小風のふけくる志うつらふたふもあへぬ 源 帚木  
心の内小思ふ事どもかゝあへどなんむらも聞え給ける 又東屋 何  
がいのち侍らん程もいれどもふさげ奉てん云云たふもあへど  
つらうまつり  
はしつとも

あへたむらげな

。あつたむらな 實大ゆて袖の如く皮厚く肌細小 ワギテ  
。らねんが 熟する事遅く氣香しく味甘酸 万士五口妹

子小あへどむらひさし 阿倍櫛の  
蘿生 和 橙 和名安倍似袖而小者也

あへつれ

あへそのをいさく器なり  
四時祭式 壺杯廿口  
壺 俗云阿開  
和膳 豆久利  
切肉合採也

あへつら

物をあへひさくさるなり敢字を多くよえり  
万九ゆらの崎 ひふけら 志ら神の  
續紀 サニ 吾加久不申成 奈波敢申人者不在

あへて

磯のうららむを敢而こぎこよむ  
祭月宴 元方大納言の靈のまじり あへど

阿らせ奉るべきけ 又御殿居 又御方々あへて立出  
給も 字拾十人のき 又御殿居 又御方々あへて立出

あへたれ

ハリアエナキ状 をのふ 又力の脱る状 をのふ  
かり 源相壺御使 もい あへた かへ

まわりぬ 又帚木 額をさぐり あへた あへた あへた  
月のまわりも心も あへた あへた あへた  
な あへた あへた あへた  
よ あへた あへた あへた

あべなん

かん 蜻 此 あべなん あべなん あべなん  
あま 此 あべなん あべなん あべなん  
あ あべなん あべなん あべなん あべなん

あへぬ

玉小安倍貫 又ハ あへぬ あへぬ あへぬ  
あ あへぬ あへぬ あへぬ あへぬ  
あ あへぬ あへぬ あへぬ あへぬ

あへん 音

あやひ

あやひ 俗

嬰子粟の脂  
なり○鴉片

草名あやひの轉本條の  
下小注も字葵阿保

吸出膏藥の  
名なり

語彙卷三



